

「父の日」に思う

事務局長

一居 利博

この原稿を書き出したのがちょうど「父の日」で、私事で恐縮ですが、亡き父のことを書かせていただきます。父は戦中・戦後が青春時代。満鉄社員として大連にて勤務をしていた時に、戦況悪化で現地招集されました。終戦後、ソ連軍の管理下で業務を続ける中、仲間と協力して奇跡的な脱出を遂げた時の生々しい体験談を、私は少年時代に幾度となく聞かされました。

父は引揚げ後、故郷で結婚し祖父が営む工場を手伝っていましたが、私が小学校入学後、地元企業に就職し生活を支えてくれました。私は高校卒業後に実家を離れて大学に通っていた頃、繊維不況の影響で父の働く会社が廃業に至り、突然我が家は生活に大きな不安を抱える事態になりました。父は失意の中、最後まで会社に留まり残務整理に奔走していました。

その後、私は地元で就職しましたが、東京で働く希望を両親に伝えたところ、母は泣いて反対しましたが、父は異存なく認めてくれました。

上京して4年後、父の体に治療困難な癌が見つかり、すぐに東京の専門病院に転院させ、長時間の大手術の末に助けてもらうことができました。父は退院後、不自由な体ながらも興味を持っていた地元の歴史研究に没頭するようになりました。大学の研究者とも交流して精を出し、遂にはその活動を地元市から表彰され、私は大いに驚かされました。しかし、徐々に癌の転移が進み再入院となり、担当医から余命僅かであることを聞かされました。会話ができるうちにと妻に促され、病室で父と二人になった時、父は「何も残してやれなくて悪かったな。」と呟いたきりで、それが最後の言葉になってしまいました。

葬儀には研究仲間の方々や父の満鉄時代の同僚の方々も遠方から来てくださり、思い出話をしてくださいました。父は常に前向きで、また、周囲に暖かな人であったことを改めて深く知りました。私の少年時代には非常に厳しい父でしたが、振り返れば、逆境にくじけない生き方を見せ、私の背中を押してくれていたように思います。何も残してくれなかったどころか、かけがえのないものをもらっていたと、年齢を重ねるに連れ実感が増えています。



小さな習慣

IR・戦略統合センター長
教育学部教育学科 教授

松本 珠希

1992年8月、私は単身渡米した。モンタナ大学の神経科学者 Charles Leonard 教授のもとで学ぶためだ。米国での生活に憧れを抱き、夢と希望に満ちた私であったが、初日から悲劇が生じた。Leonard 教授の質問に全く答えられなかったのだ。質問内容が難しかったからではない。彼の話す「生の英語」が聞き取れず、何を言っているのか分からなかった。渡米前、自分は英語ができると思っていたが、それは大きな間違いだった。授業にもついていけず、膨大な課題にも立ち往生した。秋の夕暮れ、キャンパス内のベンチに座り、「もう日本に帰ろう」と途方に暮れていた時、女神が現れた。彼女の名は Patricia。後に私の親友となるのだが、「英語で困って

るんでしょ?」、そう彼女が話しかけてくれた。Patricia は言語学者で、何人もの留学生に英語を教えていた。彼女は私に「毎日1行でいいから、英語で日記を書くように」と言った。藁にもすがる思いで、その日から日記をつけ始めた。初めは事実の記述のみだったが、次第に観察したこと、気づいたことなど、細かな描写や感情も盛り込むことができるようになり、日記の量も増えていった。

異国の地で孤軍奮闘していたある日、私は高熱を出し、病院に搬送された。幸い意識はあり、ドクターの問診にきちんと答えることができた。処置室のベッドに横になり、点滴されている時、ふと我に返った。「私、今、ドクターと自然に会話していたよね? しかも、こんなしんどい状態で…」日記をつけ始めてから約1年が経過した頃の出来事だった。当時はスマートフォンもなければ Chat GPT もない。頼みの綱は紙の辞書のみ。数行の日記でも、私なりに文法やスペルミスはないか確認しながら書き、単語や表現を覚えるようにしていた。異国の地で私の命を救ってくれた日記。その「小さな習慣」は今も続く。

Small habits make a big difference! 米国留学で得た「大きな教訓」である。

「利他行」の教えを日々の生活に生かす

教育学部 教育学科 教授
仏教文化研究所 研究員
杉中 康平



1. 短い学生生活に、どんな“足跡”を遺したいですか？

人生100年時代の今日、みなさんが本学に入学し、卒業するまでの数年は、長い人生のうちの、ほんの僅かな時間かもしれません。

本学で学んだ多くの先輩たちは、この短い数年の時を、共に集い、共に過ごし、共に学び、笑い、泣き、懸命に過ごし、巣立っていかれました・・・。

本学は、創立56年目(短大創立からは66年目)を迎えた、まだまだ若い大学ですが、推古元年(西暦593年)に聖徳太子が創建された四天王寺が、そもそも仏教を学ぶ教育施設(=敬田院(キョウテンイン))^{※1}であり、これこそが本学の前身であるとするならば、本学は、1400年以上の伝統の上に成り立つ大学であるともいえます。そして、毎年1000人近い卒業生を輩出し、今では、何万人という卒業生が、社会の各方面で活躍してくれています。

みなさんもよくご存じの歌人と謝野晶子^{※2}が以下のような歌を遺しています。文学者晶子の“面目躍如”といった感すらある作品です。

劫初より つくり営む 殿堂に 我も黄金の 釘一つ打つ
与謝野晶子 歌集『草の夢』大正11年9月

「劫初」とは、「この世の初め」という意味です。「つくり営む殿堂」とは、「先人が築いてきた(文学)の伝統」といった意味でしょうか。ここで「黄金の釘を一つ」というところが、晶子の「謙虚さ」と「自負」の両面を表した実に優れた言い回しなのです。「私(晶子)が、この日本文学に打ち込むのは、ただか一本の、ささやかな釘でしかない」という「謙虚さ」と、「しかし、それは、光り輝く“黄金の釘”である」という、自分に課せられた使命を自覚した「自負」。その両方を読み取れるからこそ、私たち読者にも大いなる勇気を与えてくれる歌となるのでしょうか。

長い人生のうちで、ほんのわずかな数年過ごす本学での日々。しかし、いや、だからこそ、大切に過ごしてほしいと願います。そして、ぜひ、あなたがこの大学で過ごした日々の“証(あかし)”を遺してほしいと願います。

あなたは、この大学にどんな自分の“足跡”を遺したいですか？晶子の言葉を借りるなら、どんな「黄金の釘を一つ」打ちつけたいですか？そして、社会に出て、どんな自分として、生きていきたいですか？

学生生活を悔いなく過ごすために、ヒントとなるのが、本学の「建学の精神」や「学園訓」にも実践的に示された「利他行」の教えです。次節では、その「利他行」について、考えていきましょう。

2. “利他行”こそが、「自己実現」の最短コース

我が国における天台宗の始祖である伝教大師最澄の言葉に次のようなものがあります。

径寸十枚 これ国宝にあらず
社会の一隅を照らす これ則ち、国宝なり
伝教大師最澄『山家学正式』より

「径寸」とは、「金銀財宝」のことです。伝教大師は、「金銀財宝は国の宝ではない」と断言しています。では、何が国の宝なのか？社会の一隅を照らす(=社会の片隅で周りを照らす)人物、わかりやすく言うならば、「今、自分があることで、自分のそばにいる人々のために頑張れる人」こそが、宝であるということです。

先ほど、晶子の歌で紹介した「黄金の釘を打つ」こと(=自分自身が光り輝くこと)、つまり「自己実現」(=自利)が、他人の犠牲の上に築かれてはいけません。また、周りの人々が不幸になっているのに、それを顧みることなく、自分だけが幸せを追求すればいいというわけでもありません。

「社会の一隅を照らす」(=他の人のために周りを照らすこと、一肌脱ぐこと)(=利他)ができる自分に“生きがい”や達成感、幸福感さえ感じること(自利利他一致の菩薩行)こそが大切なのです。

3. 「しあわせ」という言葉から「利他行」の大切さを知る

そもそも、人間にとって「しあわせ」とは、どういうことでしょうか？「しあわせ」という言葉の「幸」という漢字の読み方には、いろいろありますが、まとめると以下のようになります。

- ①「さいわい」語源は「さきわい」(咲き這い)。
*植物が、自分の花を満開に咲き誇ること。(=自己実現)
- ②「さち」(例)海の幸・山の幸
*天から(他者から)与えられた恵み(=感謝の心)
- ③「しあわせ」(語源)「仕合わせ」(=行為をし合う)
*他者(集団や社会)との関わりを通して実現するもの

つまり、「しあわせ」とは、「様々な出会いを大切にすることで実現する」ものであり、「人々の共存・共生を通して、みんなで、共に追求する」ものである、そうした営みのなかにこそ、「自己実現」があるのだということです。

4. 学修ポートフォリオに自分なりの目標を立て、足跡を刻む

本学には、毎週木曜日2限、「和の精神Ⅰ・Ⅱ」という授業が設定されています。本学の全ての1年生が大講堂で一堂に会して、本学の「学園訓」を中心に、聖徳太子の「和の精神」を学ぶ時間となっています。また、同時に、瞑想・読経(冬学期は写経も)も行い、静謐な雰囲気の中で、学生一人一人が、真摯に、自己の生き方・在り方を見つめ直す時間でもあります。

本学では、この「和の精神Ⅰ・Ⅱ」の授業での学びと並行して、実践行(=為すことによって学ぶ)の一つとして、学修ポートフォリオを活用して、以下のような取り組みをしています。

- ①自分なりの一年間の実践「目標」を立て、
- ②「なりたい自分」をめざして、日々の生活の中で「実践」し、
- ③「学修ポートフォリオ」に自分の“足跡”を打ち込む。
- ④1年間を通して振り返り、自己の成長を検証する。

この取り組みは、「PDCA」のサイクルの中で、日ごろから「学園訓」を意識し、実践していくことに特色があります。

この実践を通して、大学生活をぜひ充実したものにしてください。

※i 敬田院は、同時に衆生救済の実践の場として設置された施薬院(=薬局)、療病院(=病院)、悲田院(=福祉施設)と共に、「四箇院」とされている。
※ii 与謝野晶子: 雑誌『明星』に短歌を発表し、夫である与謝野鉄幹と共にロマン主義文学の中心人物となった。代表作に『みだれ髪』、『君死にたまふことなかれ』がある。

「ウパーヤ」学生編集員募集！！

本学の仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加していただける学生編集員を募集しています。仏教、寺院、仏像、巡礼、歴史、日本文化などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方ならどなたでも歓迎します。学部学科専攻も問いません。

これまで第4面の「聖徳太子ゆかりの地をめぐる」の取材記事の執筆、およびその取材見学の様子をホームページに掲載するなどの活動をしてきました。また、本学が仏教教育

の一環として実施している野中寺での座禅会に参加し、その実施状況をレポートしていただいたことがあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第4面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声を掛けてください。

ご連絡お待ちしております。(若松 正晃)



第23回卒業生インタビュー

話し手：辻 恭宗（つじ やすのり）四天王寺大学・四天王寺大学短期大学部 教務課員／平成31年3月 人文社会学部社会学科 卒業
聞き手：奥羽 充規（和の精神I・II導師・国際キャリア学科准教授・本欄編集）

仕事について

大学を卒業後、本学に事務職として採用いただきました。まず配属された部署は、「入試・広報課」でした。この部署では、学生の募集活動や入試業務に携わらせていただきました。学生の募集活動では、大阪府内だけでなく、近畿圏を中心に西日本のたくさんの高等学校を訪問したり、会場型の相談会に参加したりと、たくさんの高校生や先生方に四天王寺大学の良さをアピールすることができました。私が卒業生ということもあり、話に説得力があると評価いただくこともありました。高校生一人一人の将来の夢や考えに応じて適した学部・学科を紹介できることも複数の学部・学科をもつ総合大学である四天王寺大学の強みだと感じます。オープンキャンパスで在学生の皆さんと高校生をお迎えして、四天王寺大学を好きになっていただけるようにおもてなしをしたのも楽しかった思い出です。

入試・広報課で2年間勤務したあと、現在の部署である「教務課」へ異動となりました。営業職感が強い入試・広報課からデスクワーク中心の教務課への異動で初めは戸惑うことも多かったのですが、入学していただいた学生の皆さんに快適に学生生活を送っていただきたい思いとともに、しっかりと学修して頂き、将来の生活の中で、「四天王寺大学で学んだことが役に立った」と言っていたように履修や授業に関するサポートをしています。教務課は、法律と隣り合わせの業務が多く、根拠を持って業務にあたるように心がけています。また、在学中に学んだ、心理学の知識を活かし、学生さん一人一人に寄り添い、困難を乗り越えられるようにサポートできる職員を目指してこれからも頑張りたいと思います。

和の精神について

四天王寺大学で一番印象に残っている授業といえば、たいていの学生は、「和の精神(仏教)」の授業と答えるかと思います。私もそうです。大学に入学してすぐ毎週木曜日2限目、1年生約1000人が同じスーツを着て大講堂に集まって受ける授業は圧巻でした。夏学期に実践する「瞑想」は、心を落ち着けることができ、学生の頃から、休み時間と授業時間を区切るだけでなく、悩んだ時、迷った時に焦って決断せず、一呼吸おいて考える方法としても実践してきました。この「瞑想」は社会人になってからも役立っており、心を落ち着けたり、集中したりしなければならぬ場面では、スーツと長く息を吐いて呼吸を整えてから物事に取り組むようにしています。これをする事で、雑音や周りの話し声の音量が絞られたように感じ、一点に集中することができます。授業内の講話では学生生活やこれからの人生に重要なことを教えていただき、勉強になりましたが、授業開始前の数分間に司会の先生がお話された、「二十四節気と七十二候」も記憶に濃く残っており、季節を感じることで、昔ながらの日本の良き文化を学ぶことができたと感じています。

「和の精神」の授業の始まりとともに、「和」を「Harmony (調和)」と訳すこ

とができると知りました。「仏教の教え」にもありますが、他者を理解し、他者のために思い、日々の生活を送る大切さを学ぶ大切な授業だったと今振り返って改めて感じました。



学園訓について

学園訓には「四恩に報いよ」とあり、四恩とは、国の恩、父母の恩、世間の恩、仏の恩であるとされています。国とは、私はこの土地のことだと考えています。簡単に言うと、この日本という土地に生を受け、暮らせることへの恩だと思えます。父母は、育ててくれたことへの恩、世間は、地域のごとで、見守ってくれていること、そして、私は我々に心の拠り所として支えてくれることへの恩だと思えます。そして、「報いよ」の言葉ですが、これは、感謝せよといった意味もありますが、この言葉の最大の意味は、「恩返しとなるような行動をとる」ことだと思えます。ただ感謝するだけでなく、行動で示すことが大切だと考えます。この考え方は「利他の精神」にもつながることで、お互いが、相手の為を思って行動することを表しているのだと考えています。

そして、「礼儀を正しくせよ」とありますが、挨拶や敬語など、礼儀といっても様々ありますが、一番は、挨拶だと思います。「おはようございます」、「お疲れ様です」など、この言葉があるだけで、その場が活気づくように感じます。私は、窓口で学生さんの対応をする際にも必ず、挨拶から始めるように心がけています。挨拶で一呼吸置くことで、お互いが落ち着いて話をする事ができていると感じます。学生さん同士でも、簡単に「よっ」と手を上げるだけでもいいので挨拶してほしいなと思います。

在学生へのアドバイス

コロナ禍もあり、自由にできない期間が数年続き、苦しんだこと、つらかったことなど、たくさんあると思います。また、逆に、コロナ禍において家から出なくて済む方が楽だったと感じている人もいることでしょう。それぞれの思いはあると思いますが、今だからできること、特に人とかかわりを多く持つことをぜひ心がけていただきたいです。人とのつながりが多ければ多いほど、将来、つながった人々が自分に手を差し伸べてくれる可能性が高くなるでしょう。もちろん、自分が手を差し伸べる側になることもあると思います。この繋がりこそが、「和の心」であり、みなさんに実践していただきたいことです。これからの社会を担うみなさんが、ご自身にあった学びを修められ、社会で活躍されることを願うとともに、「四天王寺大学でよかった」、「四天王寺大学が好き」と言っていたように私も日々精進する所存です。

授業や履修のことで困ったことがあれば、気軽に教務課を訪ねてください。

令和5年度 夏学期「和の精神I」講話題目

4月6日	藤谷 厚生先生 奥羽 充規先生	受講どころえー授業規律に関して 授戒オリエンテーション	6月1日	上野 舞斗先生	「学園訓ー誠実についてー」
4月13日	須原 祥二学長 藤谷 厚生先生	「『和の精神』で学ぶこと」 「『ウバーヤ』について」	6月8日	矢羽野 隆男先生	「学園訓ー和についてー」
4月20日	杉中 康平先生	「『和の精神』を学ぶ意義」 「学修ポートフォリオの目標設定について」	6月15日	南谷 美保先生	「仏像を知ろう」
	伊達 由実先生	「大学生生活の心得」	6月22日	仲谷 和記先生	「薬物乱用の害について」
4月27日	奥羽 充規先生	「読経概論・瞑想 一心を整える楽しみー」	6月29日	原 祐子先生	「『聖歌』について」
5月11日	坂本 峰徳常務理事	「建学の精神と聖徳太子」	7月6日	若松 正晃先生 碓井 晴捺さん (教育学科 中高英語教育コース4年生)	「Next Innovationー留学から学んだこと」
5月18日	成田 由岐子先生	「学生生活とリスク社会について ～犯罪に巻き込まれない、起こさないために～」	7月13日	河本 実花先生 (藤井寺保健所)	「性感染症について」
5月25日	中田 貴真先生	「学園訓ー礼儀についてー」	7月20日	杉中 康平先生 藤谷 厚生先生	「学修ポートフォリオの記録について」 夏学期を終えるにあたって

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

— 西教寺（滋賀県大津市） —

西教寺は、比叡山の麓に位置する天台真盛宗のお寺です。JR 湖西線比叡山坂本駅から徒歩 25 分（バスで 7 分）の場所に位置します。この西教寺も聖徳太子が創建したと伝えられるお寺です。太子が恩師である慧慈、慧聡のために建立したと伝えられています。その後は久しく荒廃していましたが、良源（慈恵大師）が復興し、1325 年には伝教大師・最澄によって提唱された大乗円頓戒（天台宗の僧侶や信者が守るべき規範）を復興、1486 年には中興の祖・真盛が入寺し、不断念仏の道場とされました。



西教寺 総門

西教寺は皆さんがよく知る明智光秀の菩提寺でもあります。織田信長による比叡山焼き討ちで災禍を被った西教寺の復興に貢献したのが明智光秀でした。西教寺近くに城（坂本城）を構えた光秀は、西教寺の檀徒になりました。西教寺の総門は坂本城城門を移築したものだと言われています。他にも境内には光秀にちなんだブースが設置されていました。

また、西教寺では季節毎にさまざまなイベントが開催されています。私たちが訪れた際にも、「桜と青もみじとかざぐる

ま参道通り抜け」（2023 年 3 月 25 日～6 月 11 日）が開催されていました。同イベントでは、未来を担う子どもたちの健やかな成長を願って、お寺内の至る所に 2000 個の色とりどりのかざぐるまが奉納されていました。この「かざぐるま」というものは昔から子どものおもちゃの象徴であり、勢いよくクルクル廻る様子は子どもたちが元気に遊ぶ姿を想起させます。子どもを授かりたい



西教寺本堂とかざぐるま

と願うお母さまがお地藏さまから輝く玉（宝珠）を授かる夢を見て生まれたのが宝珠丸、西教寺の宗祖・真盛上人です。室町時代・戦乱の世に人々を救うために尽力した真盛上人（宝珠丸）にあやかり、子どもの成長を願うという思いを込め本イベントが開催されていました。イベント中は「オリジナルかざぐるま作り」に参加したり、特別御朱印「かざぐるま特別印」も受け取ることができました。境内には金色のかざぐるまも隠されており、福を招くかざぐるまを探してまわるのも楽しそうですね。

今回の取材を通じ、聖徳太子の教えが県を跨いで、さまざまな地域に伝承されていたことを学ぶことができました。直接足を運ぶことによって、見える景色、得られるものも変わってきます。是非、皆様も西教寺に訪れてみてください。

（学生編集員 和泉凜）

仏教のことは

— 有頂天 —

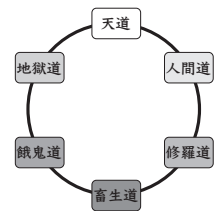
得意の絶頂になり、喜びで舞い上がることや、夢中になって我を忘れる状態のことを「有頂天になる」といいます。この「有頂天」とは、仏教の言葉でもあります。では、有頂天は、どこにあるのでしょうか？

仏教では、迷いの世界を六つに分けて「六道」とし、人に、この六道の世界で生まれてかわり死にかわりしながら、迷いの生を生き続ける「六道輪廻」の状態から、いかにすれば脱して仏になれるのかを説きます。この迷いの世界である「六道」の中で一番高いところにあるのが「天」で、こ

の天の世界は、三界二十八天と細かく分類されています。その天の世界の中で頂上に位置する天を、「悲想非非想処天」といい、これを頂上にある天という意味で「有頂天」と呼ぶのです。この「天の最上にある天に登りつめる」ことから、一般用語として、「絶頂を極める」の意味に転じて使われるようになったのです。

が、「最高の天」とはいても、それは「六道」の迷いの世界の頂点にすぎません。まだまだ「悟りの世界」に到達したというわけではないのです。有頂天になっていると、気分が高揚するあまりに足元は不安定になっています。ですので、あまりに浮かっていると、「迷いの世界の頂点」から、足を踏み外して六道の「他の世界に転落してしまうかもしれない」ということもお忘れなく。

（南谷 美保）



編集後記

皆さまのご尽力により UPAYA 23号が発行できますことに心より感謝申し上げます。今号では、一居事務局長には「父の日に思う」、松本 IR・戦略総合センター長には「小さな習慣」、教育学部教育学科の杉中先生には「利他行」の教えを日々の生活に生かす」をご執筆いただきました。また、卒業生インタビュー、学生編集員による西教寺への参拝の報告、仏教のことは「有頂天」が掲載されています。学園訓は学生に限らず、教職員も非常に大切にしているものですが、これらの記事を通して「学園訓の実践」の重要性を再認識いたしました。

新型コロナウイルス感染症の位置づけが「5 類感染症」となり、キャンパスライフを取り戻しつつあるように思えます。夏学期にはアメリカ・カナダ・中国の提携校から短期研修の学生を迎えることができました。本学の学生とともに、茶道・華道をはじめとする和文化に親しんでいる姿が久しぶりに学内で見られて、とても嬉しく思いました。今後、学内外における実践行の機会をさらに拡充していただけることを願いつつ、編集後記いたします。

（中田 貴貞）

研究所員紹介

所長 須原 祥二（学長・教授）
主任研究員 藤谷 厚生（教授）
研究員
 上瀬 宏道（教授） 杉中 康平（教授）
 南谷 美保（教授） 矢羽野 隆男（教授）
 奥羽 充規（准教授） 中田 貴貞（准教授）
 李 美子（准教授） 上野 舞斗（専任講師）
 坂本 光徳（専任講師） 若松 正晃（専任講師）
客員研究員 桃尾 幸順
 （職位・五十音順）

UPAYA (ウパーヤ) 23号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。
 令和 5 年 9 月 1 日 発行
 発行 四天王寺大学
 仏教文化研究所 仏教教育センター
 所在地 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1
 TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-9940
 URL:http://www.shitennoji.ac.jp/

「UPAYA (ウパーヤ)」に関する
 ご意見やご感想はこちらへお寄せください。
E-mail bukken@shitennoji.ac.jp
 （件名は「ウパーヤ」としてください）

